

3 近代と空間観の変化

—大都市の誕生と空間の変遷—

前回のまとめ

「親密空間」「公共空間」「プロクセミックス」「儀礼的無関心」などをKeywordに、電車の車内をフィールドとして、目に見えない相互行為を自分の目で観察するためのレッスンを行った。「社会」は目に見えにくい無数の相互行為によって形成されていることを確認した。

今回の主題

今回は、近代化に伴う社会空間の変遷(社会類型論)を社会学の基本的概念とともに学ぶことにしよう。

- ①相互行為の原理の変化
- ②大都市の誕生と空間の変遷(親密空間の公共空間の分離)
- ③ゲマインシャフトとゲゼルシャフト
- ④機械的連帯と有機的連帯

KEYWORD

Gemeinschaft(ゲマインシャフト)

Mechanical Solidarity(機械的連帯)

鉄道

Gesellschaft(ゲゼルシャフト)

Organic solidarity(有機的連帯)

移動電話

二つの行為の文脈

贈与と交換

自由と依存

二つの行為の文脈

- ①親密な関係にある者同士(パーソナルな関係)の相互行為の文脈とそうでない者同士(インパーソナルな関係)の相互行為の文脈との違いは、行為者が行為の成功のために、どのような要因を頼りにするかということにある。
- ②私たちは、ほとんど自分たちの知らない、非常に多くの人びとの行為に依存している。そのために、普遍的な規則に訴えることがコミュニケーションを可能にする唯一の方法である。

(もし他者のパーソナルな資質について、あなたが厳密に調査して下した評価だけに基づいて相互行為がなされるとすれば、どれだけ膨大な量の知識を集めなければならないかを想像してみよう)

二つの行為の文脈

③現実的な方法は、普遍的な規則を把握するとともに、相手も同じ規則を把握しており、それにしたがつていると「信頼」することである。

【例】貨幣、診療医、乗った列車、料理、ガスの点検員などの「資格証明書」

④インパーソナルな相互依存のネットワークが広範囲にわたり、見通せないものになればなるほど、「深く、健全な」パーソナルな関係を求める気持ちは強さを増す。

贈与と交換

督促状

①兄のところへ行って、借金を頼む
(パーソナル〈personal〉な関係)

②銀行へ行って、借金を頼む
(インパーソナル〈 impersonal〉な関係)

①兄は少しの説教後に用立ててくれるだろう。銀行は借金と利息とをあわせて返済できるだけの収入があるかどうか(場合によっては担保を要求)を審査し金を貸すだろう。

②兄が私の要求を拒むならば、兄が私に金を貸せない証拠を示さなければならぬが、銀行は状況が違う。すなわち、私が銀行に期日とおりに債務を返済できることを証明しなければならない。

贈与と等価交換という相互行為

3つて自分の関係

贈与

等価交換

- ・属性が重視される。
- ・損得ではなく、道徳的観点が優先される。
- ・最も純粹な形態は私心なく、受け手の資格を問わずに行われる。
- ・道徳的な満足感は、自己犠牲の痛みや結果として生ずる損失の大きさに比例。

- ・業績が重視される。
- ・利己心が優先される。
- ・「正当な報酬」への関心によって動機付けられる。
- ・交換による損得、すなわち利益追求が重視される。

- ①自由である同時に自由でないということが、私たちのもっとも一般的な経験なのかもしれない。自由とは、決定や選択を行えることを意味する。
- ②自分は本当に自由であるか、自分の生活を統制しているか、少し考えてみただけで自由が実際制限されていることを示す例は多い。
- ⓐ私も他人も同じ目的を追求しているが、必ずしも全員が目標を達成できるわけではないことがわかる(例:大学入学、奨学金など)。
 - ⓑわたしの決心や善意だけでは十分ではないことがわかる(自由に行動するためには、自由意志に加えて資源が必要:お金、属性、過去の行為)。
 - ⓒ自由を十分に發揮できるのはある集団のなかにおいてである。
- ③集団の背反する役割
=私が自由であることを可能にすると同時に私を束縛する。

中世社会と〈第一次的絆〉

資本主義社会以降

共同体的な社会

「近代社会とくらべて、中世社会を特徴づけるものは個人的自由の欠如である。当時ひとはだれても社会的秩序のなかで、自分の役割へつながっていた。…しかし近代的な意味での自由はなかったが、中世の人間は孤独ではなく、孤立してはいなかった。生まれたときからすでに明確な固定した地位をもち、人間は全体の構造のなかに根をおろしていた。こうして人生の意味は疑う余地のない、また必要もないものであった。…社会的秩序は自然秩序と考えられ、社会的秩序のなかではつきりした役割を果たせば、安心感と帰属感とが与えられた。…人間はまだ第一次的な絆によって世界に結ばれていた。彼はまだ自己を〈個人〉としては認めず、ただ社会的役割という点でのみ、自分の存在を意識していた。」

(Erich Fromm(エーリヒ・フロム)『自由からの逃走』創元社、1941=1965年、52-3頁)

近代人における〈自由〉の二面性

「資本主義の経済的発展とともに、心理的雰囲気にも著しい変化が起つた。…個人は経済的・政治的な束縛から自由になる。彼はまた、新しい組織のなかで活動的な独立した役割を果たせば、積極的な自由を手に入れることができる。しかし同時に、かつての安定感と帰属感を与えていた絆から解放される。…人間は閉ざされていた世界のなかでもついていた固定した地位を失い、自己の生活の意味に答えるすべをなくしてしまう。その結果、自分自身についての、また生活の目標についての疑惑がふりかかる。彼は、強力で超人間的な資本や市場の力に脅かされる。仲間にたいする関係も、すべて心の奥底には競争心が巣くっていて、敵意にみちた空々しいものとなつた。彼は自由になつた。一いかえれば孤独で孤立しており、周囲から脅かされているのである。…新しい自由は必然的に、動搖・無力・懷疑・孤独・不安の感情を生み出す。」

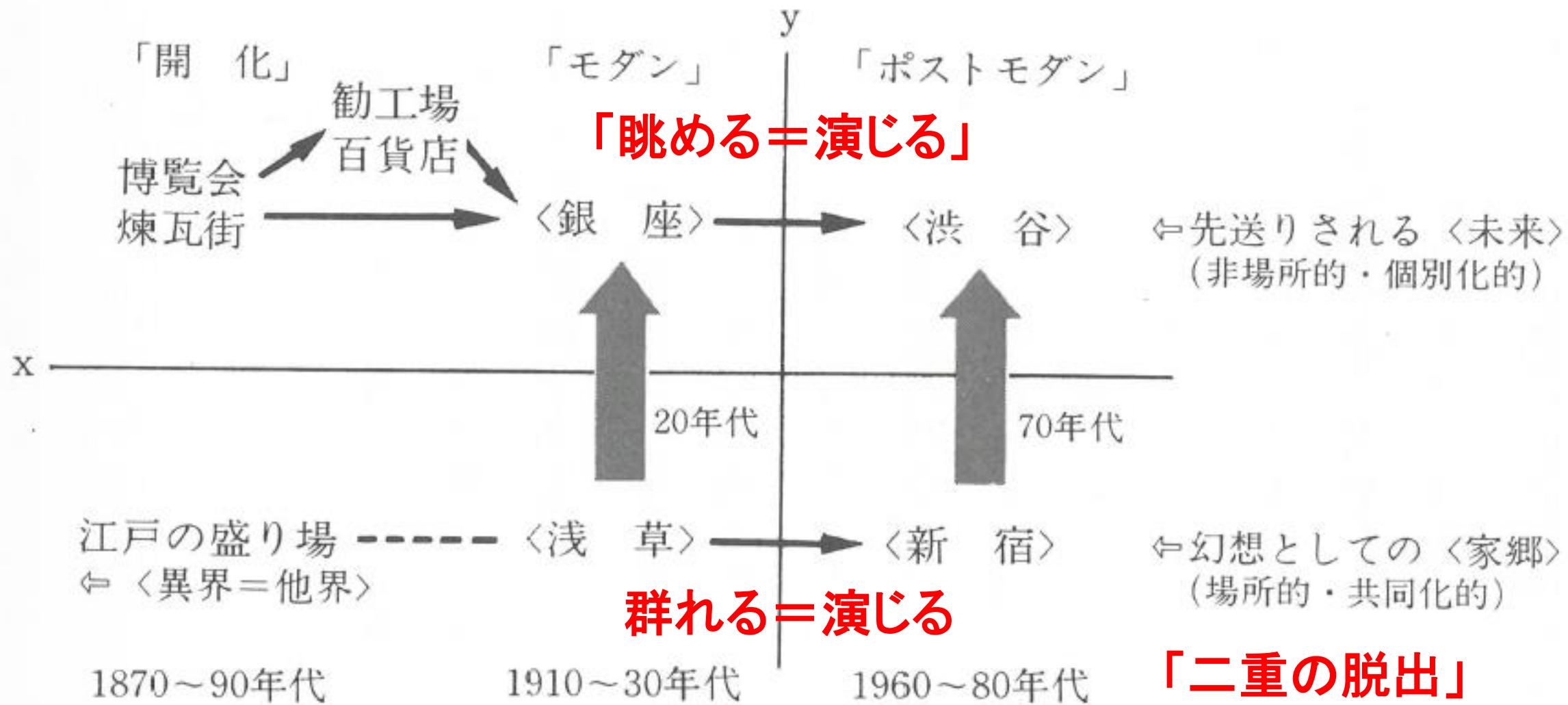
(Erich Fromm(エーリヒ・フロム)『自由からの逃走』創元社、1941=1965年、71-2頁)

近代的な空間編成と変容
「人口移動、鉄道、携帯電話」

関東大震災(1923年)以降、東京の主役となつたのは、郊外へと移動した工場労働者やサラリーマンという近代的な雇用労働者層であった。そして、大規模な人口移動は必然的に「通勤」という新しい現象を生み出した。この雇用労働者層においてはじめて親密空間(休養地)と公共空間(活動地)とが空間的に分離される。

「こうして家庭と職場とをつなぐ通勤現象が大量に発生し、その中継点としてのターミナルが新しい盛り場として発展をはじめることになるのである」

(寺出浩司『生活文化論への招待』弘文堂、1994、154頁)



〔図V・1〕「盛り場=出来事」の展開

地理的な問題(イナカとトカイ)と時間の問題(過去と未来)

産業化に伴う都市化に対応した郊外化



「地域共同体の弱体化」と「家族の機能弱体化」



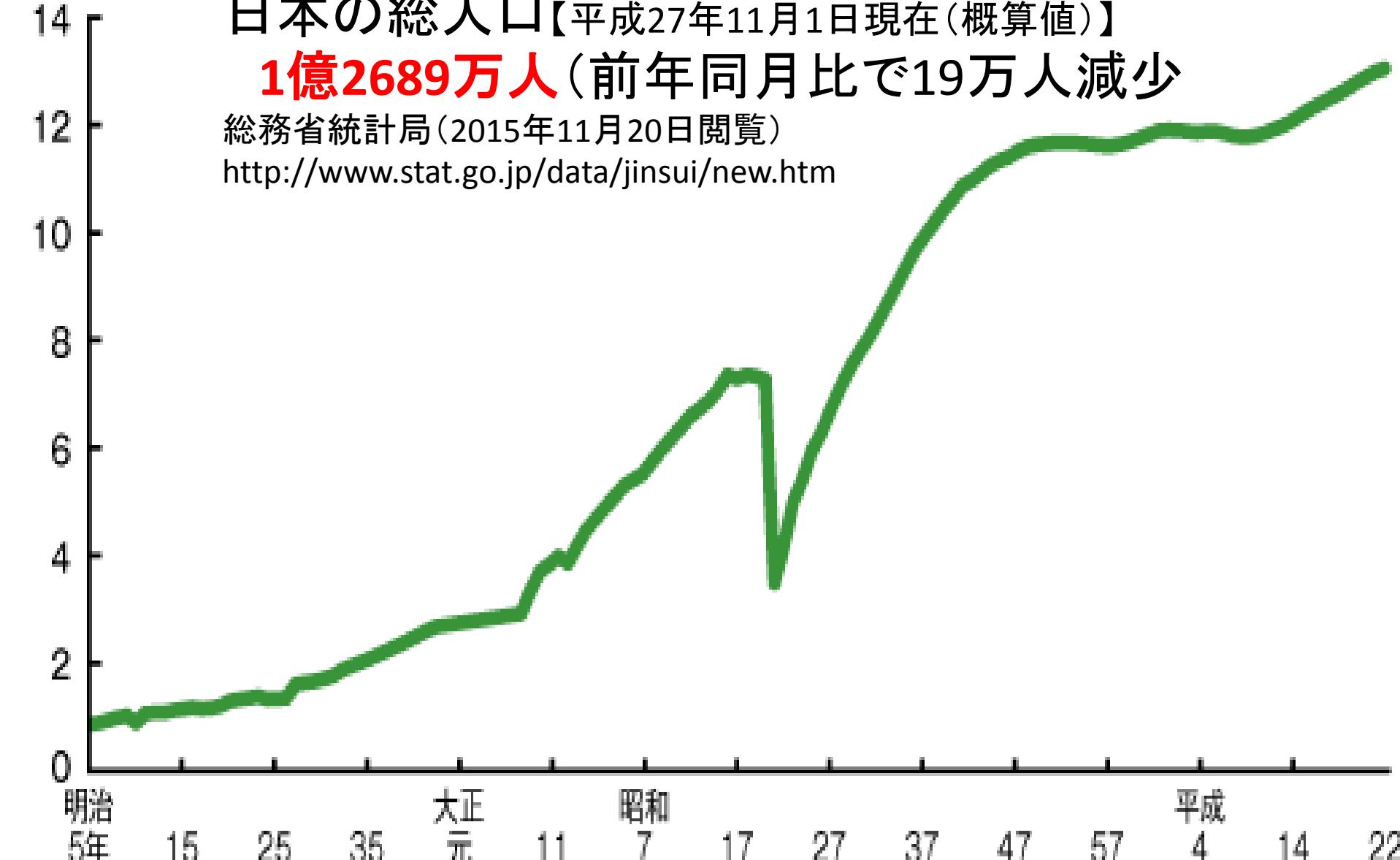
- ・もやは、家族が唯一の共同性を担う場所という状態ではなくなる。
- ・父親は会社勤め、母親は専業主婦、子どもは学校や塾というそれぞれの個別の「場(空間)」において生活を始め、家族の共通の場がなくなっていく。

東京都の人口推移

百万人

日本の総人口【平成27年11月1日現在(概算値)
1億2689万人(前年同月比で19万人減少)

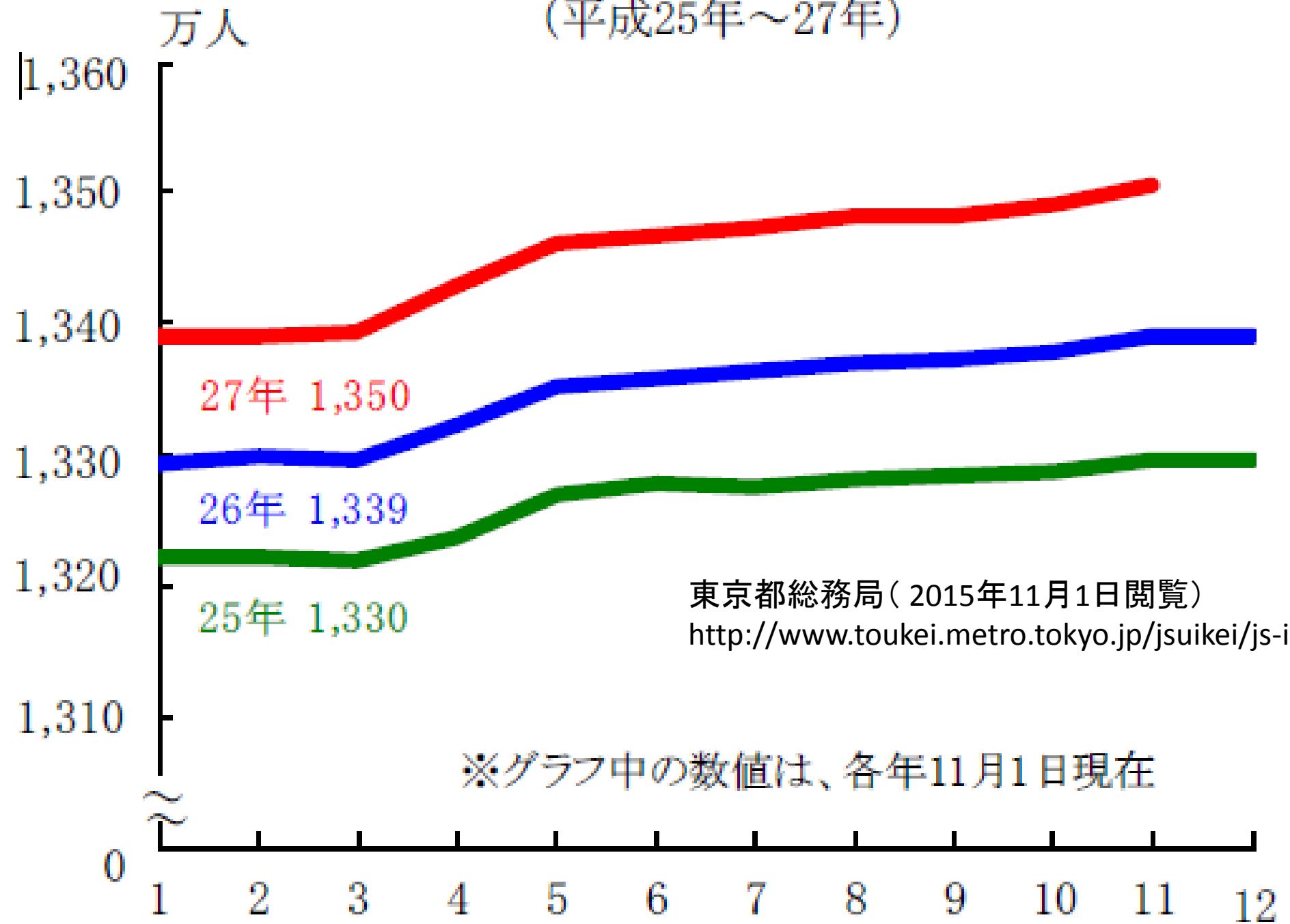
総務省統計局(2015年11月20日閲覧)
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.htm>



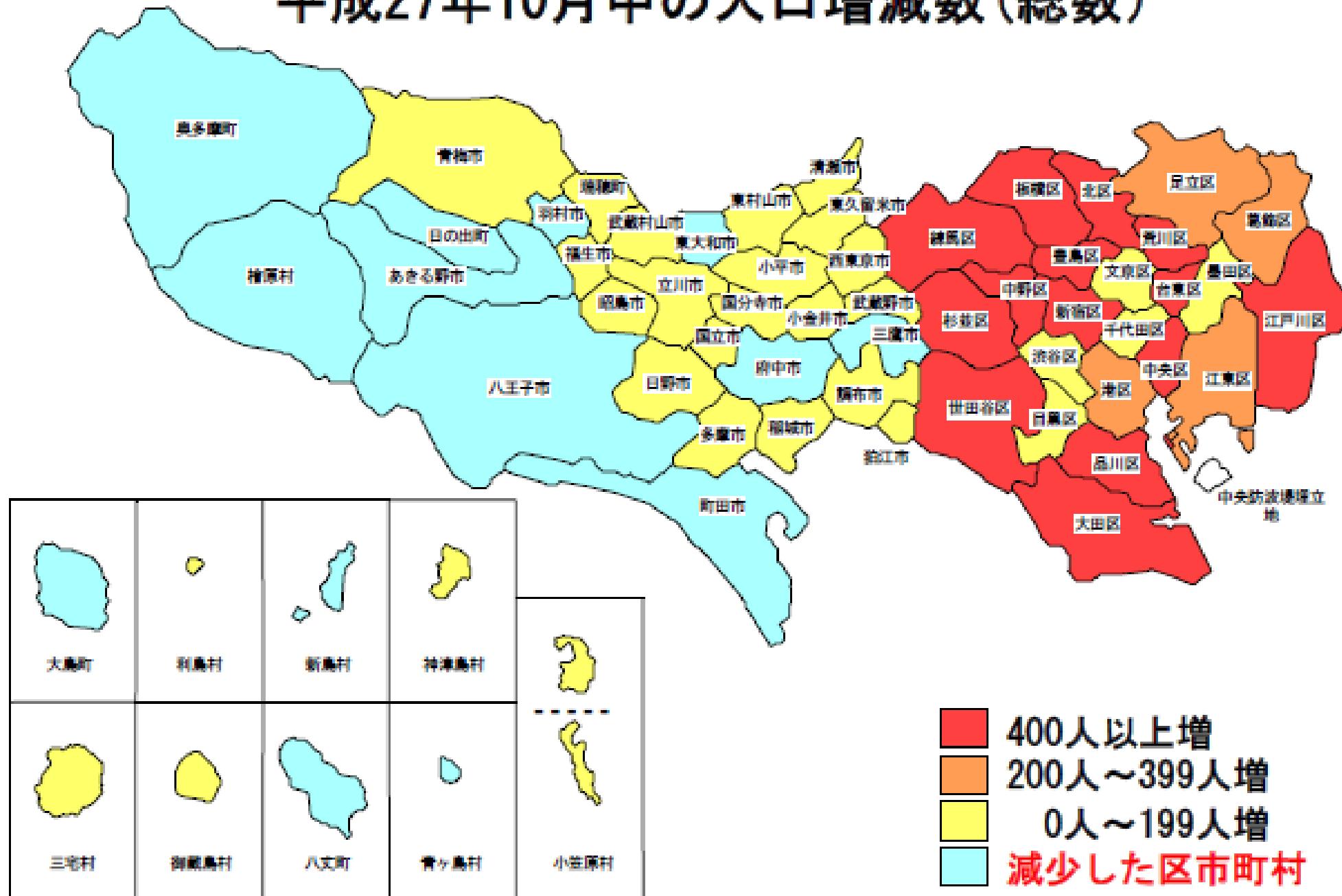
東京都総務局統計部調整課 統計広報係(2012年3月31日閲覧)
<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/kurasi/2011/ku-B.html>

【東京都の場合】

参考図1 総人口(推計)の月別推移
(平成25年～27年)



平成27年10月中の人口増減数(総数)



東京都総務局(2015年11月1日閲覧)

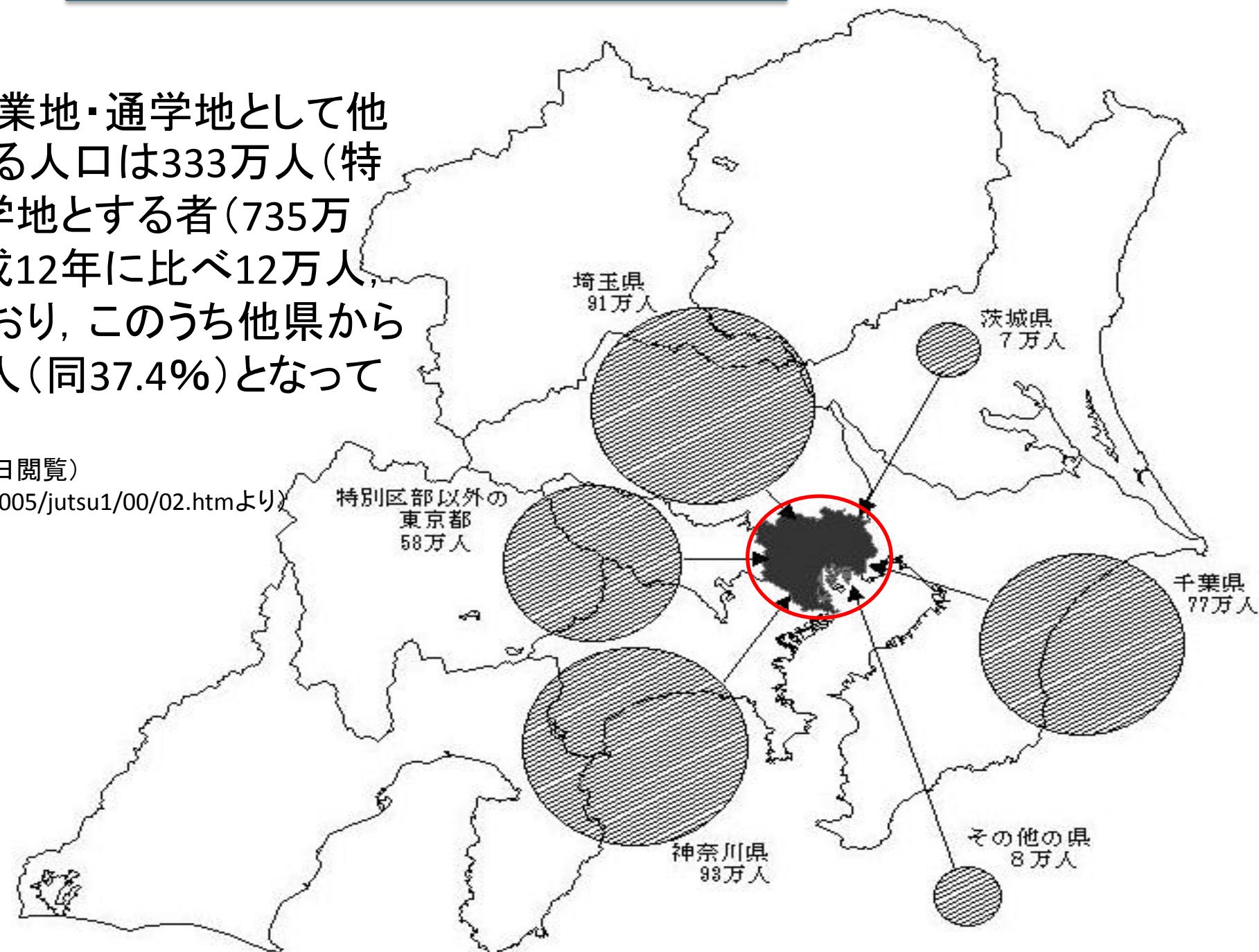
<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/jsuikei/js-index4.htm>

首都圏への通勤通学人口

2005年の場合

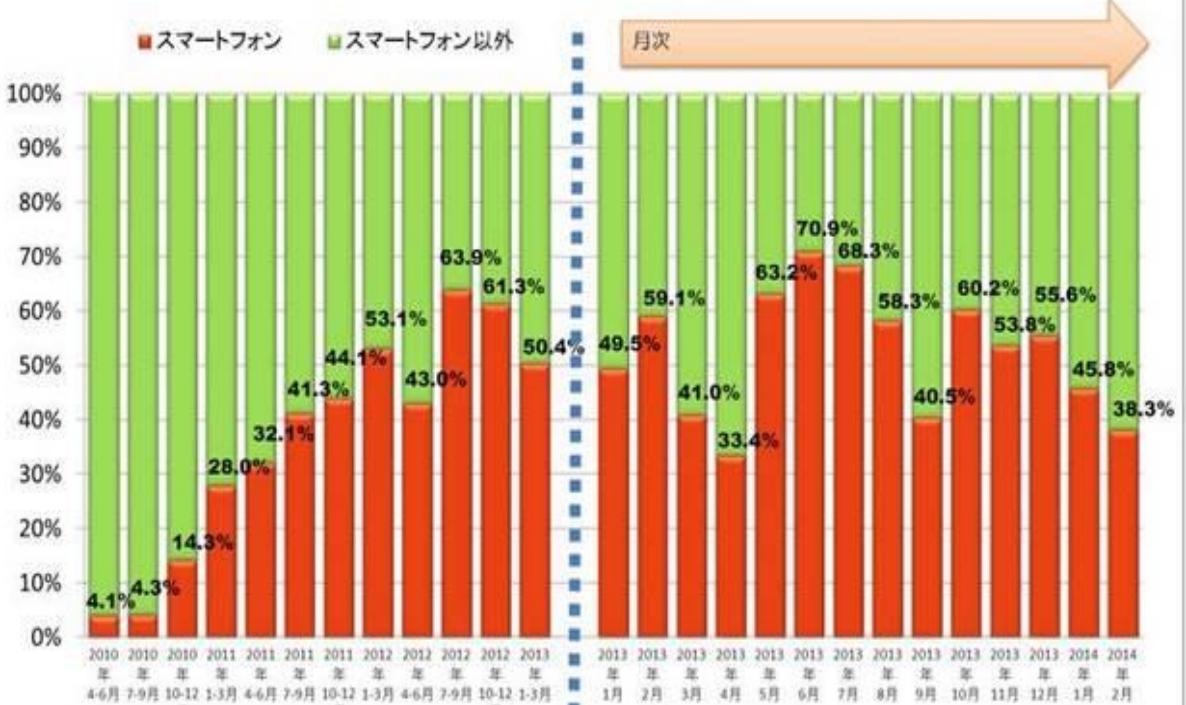
東京都特別区部を従業地・通学地として他
市区町村から流入する人口は333万人(特
別区部を従業地・通学地とする者(735万
人)の45.3%)で、平成12年に比べ12万人、
3.4%の減少となっており、このうち他県か
らの流入人口は275万人(同37.4%)となっ
ている。

(【出典】総務省統計局(2014年5月1日閲覧)
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/jutsu1/00/02.htm>より)

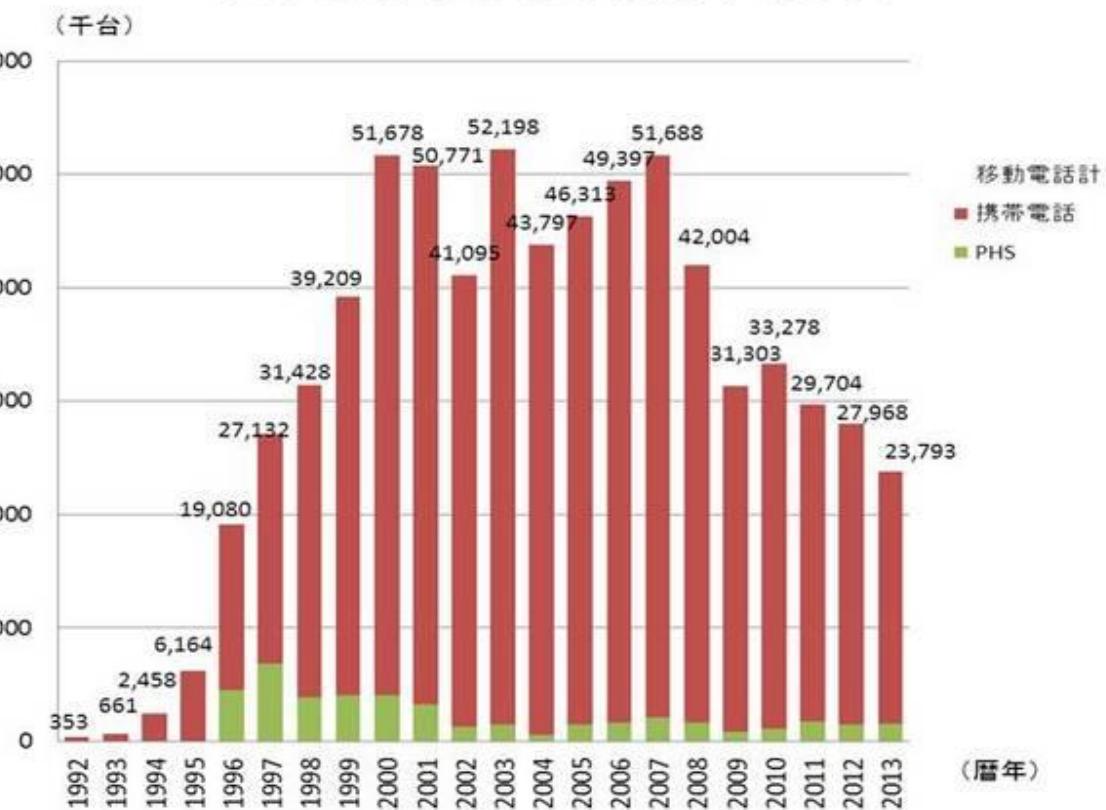


移動電話国内出荷実績 年度推移(1992年度～2013年度)

スマートフォン比率推移



移動電話国内出荷台数推移(暦年)



「2011年11月の移動電話国内出荷台数は2,049千台、前年同月比64.5%と3ヶ月連続のマイナスとなった。なお、11月は累計契約数が総人口をはじめて超え、人口普及率が100.4%となった」

①公共空間を作りだすメディアとしての鉄道

鉄道はかつての親密空間における「習慣や道徳をすっかり変えてしまった」のである。鉄道はこの新しく生まれた公共空間における新しい習慣として車内読書を作りだした。

W.H.スミスが1848年ロンドンのユーストン駅で新聞や書籍を販売したのが、駅構内で新聞や書籍が売られるようになった初めである。日本でも1872年の鉄道開業とほぼ同時期に駅構内の新聞の販売が始まった。

(永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年、44頁)

②「固定電話」から「移動電話」への変化

鉄道が近代的な空間編成を作りだすメディアであったように、電車の車内に現れた携帯電話はこの近代的な空間編成を作りかえる可能性を持っている。

鈴木忠志によれば、1990年代における携帯電話やインターネットなどのITの普及によっても日本人の（空間感覚）や（身体感覚）が変わったという。

（鈴木忠志「日本社会の変化と伝統の変質」『演劇人 12』2003、71~9頁）

社会の類型論

社会の類型 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」

フェルディナント・テンニース (Ferdinand Tönnies; 1855-1936) は、近代化とともに社会形態が変遷していくと考えた。

フェルディナント・テンニエス 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粋社会学の基本概念—』
(杉之原寿一訳、岩波文庫、1957)

ゲマインシャフト (Gemeinschaft)

持続的な真実の共同生活

「互いに愛し合い、互いに慣れ親しみやすく、…ともに語りともに考え合う」

家族や古くからの町など親身な関係が支配している共同体組織

(=伝統社会)



ゲゼルシャフト (Gesellschaft)

一時的な外見上の共同生活

「人々はそれぞれ一人ぼっちであつて、自分以外のすべての人々にたいしては緊張関係にある。かれらの活動範囲や勢力範囲は相互に厳格に区切られている」

企業や大都会のような機能体組織
(=利益社会)

ゲマインシャフト (Gemeinschaft)

「本質意志にもとづく結合体」
生まれながら決まっている、人間が意思とは関係なしに結び付けられる人間関係

血のゲマインシャフト
(母子、家族、親族、民族)

場所のゲマインシャフト
(隣人、村落)

精神のゲマインシャフト
(友人、〈中世自治〉都市)



ゲゼルシャフト (Gesellschaft)

「選択意志にもとづく形成体」

- ・人間が自分の理性で作る契約的な人間関係

契約・近代大都市
・学者共同体など

- ・テンニースはマルクスの資本主義論とホップスの社会契約論（「万人の万人に対する戦争状態（=所有的市場社会）」）を結合させて、社会類型論としての「ゲゼルシャフト」概念を構築し、これに対置される「ゲマインシャフト」概念が提示された。つまり、近代化（主に資本主義化）によってゲマインシャフトが解体されると捉えた。
- ・近代という時代は、計算尽くの関係を生み出すと同時に、計算尽くでないような親密な関係を生み出す。計算尽くの関係は計算尽くでない関係に補完されつつ存在しているのではないか。
- ・G.Simmel（ジンメル）は新しい相互作用の可能性を見出し、「大都市の生活形態において直接には解体と見えるものが、こうして現実においてはその根本的な社会化形式のひとつにほかならない」とした。

【参考資料】「資本主義」

「資本主義はきわめて多くの概念規定をもっている。それを大別すると、資本主義の本質を一定の経済機構の特性において把握する方法と、そのなかに支配的な経済精神によつて把握する方法とがある。前者は資本主義の現実的な把握であり、これにはマルクス、ホブソン J. A. Hobson(1858-1940)、ディール K. Diehl(1864-1943)などが属し、後者は心理的もしくは観念的把握であり、ヴェーバー、ゾンバルトがこれに属している」

(林達夫・野田文夫・久野収・山崎正一・串田孫一監修(1971)『哲学事典(改訂新版)』平凡社、617頁)

「資本主義経済の根本条件は、西欧の16世紀以後に出現した生産者と生産手段の根源的切斷であった(マルクス『資本論』第1巻第24章)。…人間労働は自己維持に必要なもの以上を創造する力を持っている。私的所有の下では、労働賃金に表現される必要労働以上のもの、すなわち剩余労働を資本は無償で所有する権利がある。…要するに、資本は剩余価値であり、剩余価値は資本と労働の社会関係の経済的表現である。マルクスの資本主義論は18世紀後半から19世紀中葉までに客観的に観察された社会的傾向を概念的に把握したものである」

(今村仁司・三島憲一・川崎修編集(2008)『岩波 社会思想辞典』岩波書店、132-133頁)

E・デュルケームの場合.

Mechanical Solidarity (機械的連帯)

- ・共通の信念・感情を尊重
- ・自動的連帯
- ・共同意識、共同体優位
- ・たとえば(氏族社会)



Organic solidarity (有機的連帯)

- ・分業にもとづく連帯
- ・相互の個人性の尊重
- ・個人主義道徳
- ・組織型社会
(職業組織)

ちなみに、機械的連帯と有機的連帯という社会統合に関する対概念は『社会分業論』のなかで用いられた、その後の著作で使用されなくなった。その理由について、R.ニスベットは「デュルケムが有機的連帯という社会統合の可能性を放棄したため」だという。

Robert Alexander Nisbet, *The Sociological Tradition*, (Basic Books, 1966).
中久郎監訳『社会学的発想の系譜(1-2)』(アカデミア出版会, 1975年, 86頁)

①「Primary Groups(第1次集団)」と「Secondary Groups(第2次集団)」

クーリー(Charles Horton Cooley、1864～1929、アメリカ社会学者)による集団の類型概念で、メンバー同士が対面的な関係にあって協力し合っている集団のことである。この場合「第1次」という言葉には、社会のあらゆる結びつきの源泉をなしているということ、つまり、どんな複雑な社会的関係も、その基本的な特徴は第1次集団に単純化された形で見出せるという意味が込められている。第1次集団以外の集団についてはクーリー自身は特別な名称を与えていないが、「第2集団」の名で呼ばれることが多い。

C.H.クーリー『(現代社会学大系 4)社会組織論』(大橋幸・菊池美代志訳、青木書店、1971年)

②「Community(コミュニティ)」と「Association(アソシエーション)」

マッキー・ヴァー(R.M. MacIver、1882～1970年、アメリカ社会学者)の提示した集団概念で、「コミュニティ」とは、①共同生活が営まれていて、②それより広い何がしかの領域から区別される領域を成り立たせるいくつかの特徴をもった集団のことである。「コミュニティ」の共同生活の成立のためには、地域的な近隣性が重要な条件となる。「アソシエーション」は、共同の関心の追求のために、明確に設立された社会生活の組織体として定義される。

マッキー・ヴァー『コミュニティ－社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』(中久郎・松本通晴訳、ミネルヴァ書房、2009年) *Community, 1917*

「共同社会関係と利益社会関係」

Max Weber『社会学の根本概念』(清水幾太郎訳、岩波文庫、1972、第9節参照)

共同社会関係

例えば、信仰で結ばれた仲間、恋愛関係、信頼関係、民族共同体、戦友として結束した部隊。最も適切な類型は、家族共同体。

利益社会の純粹な類型

- ①市場における、自由な契約による純粹目的合理的な交換
- ②自由な契約による純粹な目的団体
- ③価値合理的動機による信仰団体

集団の類型

	区 分
Ferdinand Tönnies (F.テンニース)	Gemeinschaft (ゲマインシャフト)
E.Durkheim (E・デュルケーム)	Mechanical Solidarity (機械的連帯)
Max Werbr (M.ウェーバー)	共同社会関係
C.H. Cooley (C.H.クーリー)	Primary Groups (第1次集団)
R.M. MacIver (R.M.マッキーヴァー)	Community (コミュニティ)
	Gesellschaft (ゲゼルシャフト)
	Organic solidarity (有機的連帯)
	利益社会関係
	Secondary Groups (第2次集団)
	Association (アソシエーション)